

経済産業省資源エネルギー庁 令和7年度原子力発電施設広聴・広報等事業 [地域情報交流普及啓発] において制作されたものです。



原子力 立地地域を訪ねて 佐賀県玄海町



佐賀県北西部に位置する玄海町。西は玄界灘、北・東・南を唐津市に接し、

雄大な玄界灘に面したリアス式の美しい海岸は玄海国定公園に指定されている。

美しい海と雄大な自然に囲まれた玄海町は、九州電力玄海原子力発電所が位置するエネルギーの町でもある。

今回、玄海町を巡り町の魅力を探るとともに、玄海町で力を注ぐエネルギー教育について取材をした。



中山牧場で飼育する黒毛和牛

美しい海と雄大な自然 そして佐賀牛が育つ町

玄海町は面積36km²、人口は5000人弱。山間地域で農業、漁業の町だ。ミカン栽培に力を入れており、ハウスミカンの生産量は全国シェアナンバーワン。佐賀牛生産の本場でもあり、人口よりも牛の数が多いいという。

大きな牛の看板に引き込まれるように中山牧場の中山敬子さんを訪ねた。中山牧場では自家繁殖とセリ落とした仔牛の約1900頭の牛を育てている。「佐賀牛は、数多くある銘柄牛の中でも、2番目に格付け基準の厳しいブランド牛。全国の黒毛和牛の中でもトップレベルの肉質」と中山さんは胸を張る。中山牧場で飼育された佐賀牛は、九州地域に加え、関東はじめ全国に卸している。

牛舎では、つぶらな瞳のかわいらしい牛たちが出迎えてくれた。「みんな落ち着いているでしょ。穏やかでおっとりした牛は肉質もいいんです」と中山さん。繊細な性格の牛にストレスをかけない飼育に心を配るといふ。牛たちが食べている稲わらは、佐賀平野で育つ佐賀米の稲わらを自分たちで調達する。豊かな土地で育った佐賀米の稲わらが佐賀牛の高い肉質を支えて



いるのだ。

「飼料や燃料費の高騰など畜産業を取り巻く環境は厳しいものもあるが、国産和牛の歴史を伝え、次世代に繋ぎ、佐賀牛ブランドを守り続けていくことが使命」と中山さんは締めくくった。

日本のエネルギーを支える 玄海町

中山さんと別れ、玄海町長に話を聞くため、町役場に向かった。道すがら見える浜野浦の棚田や玄海湾。自然の魅力溢れる町だと改めて感じる。ひときわ眺望の開けたところに玄海原子力発電所が立地していた。

「1975年に玄海原子力発電所が運転を開始して以降、原子力発電と共栄してきた。日本のエネルギー安全保障を支える町だと自負している」と玄海町長の脇山伸太郎さんは切り出した。AI普及に伴うデータセンター等による電力需要増が見込まれるなか、安定的に経済的な電気を供給できる原子力の役割が再認識されつつある。そして、立地地域にとっては、雇用を生み出すという大切な側面があるという。「原子力発電所での雇用に加え、定期検査時には県外からも多くの人



株式会社中山牧場 中山敬子さん



玄海町長 脇山伸太郎

が施設に入り点検を行う。飲食業や宿泊業等の活性化にも繋がり、原子力は裾野の広い産業」と脇山町長。

長年にわたり、日本のエネルギー政策と電力安定供給に寄与してきた玄海町では2024年5月、高レベル放射性廃棄物最終処分の文献調査受け入れを表明した。背景には、原子力立地自治体が文献調査を受け入れることで、国民的議論のきっかけとし、候補地の拡大に繋がる呼び水にしたいという思いがある。「最終処分は日本全体で考えるべき課題で、特定の地域だけの問題ではない。関心が高まり、理解が進むきっかけになることを望んでいる」と脇山町長は力を込める。

町の活性化へ 少子高齢化に挑む

多くの地方自治体同様、少子高齢化の課題に直面する玄海町。脇山町長は、データセンターの誘致など産業振興に取り組むとともに、教育にも力を注ぐ。町内にある県立唐津青翔高校では、e-SPORTS学科を新設し、2026年度から始動する。県外からの見学者も増えているという。「子どもたちの育成が町の将来を作っていく。誇りを持てる町づくりと将来を担う次世代育成に力を注いでいく。子どもたちのなかから将来町長になりたいという子が出てくれば嬉しい」と脇山町長は笑顔を見せた。



上：浜野浦の棚田 下：玄海町次世代エネルギーパーク あすぴあ



上：玄海みらい学園 下：海洋教育の一環で切り絵を制作



小中一貫の義務教育学校 玄海みらい学園

「教育について詳しくは岩崎一男 教育長へ」と脇山町長が繋いでくれ、玄海みらい学園へ車を走らせた。玄海みらい学園は玄海町唯一の小中学校であり、小中一貫教育を実施。2015年町内の2小学校と2中学校を統合し、小中一貫として開校。さらに2017年には新たに義務教育学校としてスタート。現在、356人の児童・生徒が在籍する。

特色の1つは海洋教育。玄海みらい学園は、笹川平和財団の助成事業である海洋教育パイオニアスクールに認定されており、養殖施設の見学など、学年ごとに体験活動を行っている。2025年1月には、玄海町教育委員会主催で「海洋教育子どもサミット」を行い、海洋教育に取り組む他地域との交流も深めている。サミットをきっかけに台湾の鼻頭小学校の児童が同校を訪れ、直接交流する機会もできた。「海洋教育子どもサミットでは、生徒が活動報告を実施。地域内に閉ざすのではなく、他地域とコミュニケーションを重ねることが、生徒の自信にも繋がっている」と岩崎教育長。

エネルギー教育は 立地地域の務め

もう1つの特徴が、エネルギー教育だ。玄海町では教育方針に「原子力発電を含めたエネルギー問題や環境問題についての学習を図る」と明記し、エネルギー体験学習・出前講座等の活用と副読本「私たちの玄海町」での学習を進める。エネルギー体験学習では、希望者が夏休みに茨城県東海村など他地域の施設を見学。出前授業では九州電力から講師を招き、年に1・2回エネルギー学習を行っている。



教育長 岩崎一男



エネルギー教育で使用している副読本

「私たちの玄海町」を拝見すると、玄海原子力発電所が果たす役割から原子力防災に至るまで、図表や写真を用いて丁寧に説明している。「教科の1つとしては限られた内容しか学べない。地域学習をテーマとした総合的な学習の時間でエネルギーを伝えていくのが立地地域の役割だと考えている。エネルギー教育を進めることで、エネルギーについて正しく学び、ふるさと玄海町が果たしている役割を伝え、故郷を誇りに思う子供に育てていきたい」

最後に、学園内を案内してもらおうと、学園を出てすぐに塾があった。これは?と聞くと、玄海町では町営の塾を運営しており、月3000円程度で授業の予復習ができるという。「受験対策的な塾ではなく、日々の予復習を中心に学習の定着、家庭学習の習慣をつけることが役割」と岩崎教育長。

「地域で子どもを育て、玄海町を誇りに思う子どもを増やしたい。ここを巣立った子どもたちが次の玄海町を作ってくれと願っている」

岩崎教育長の話を聞きながら、「町長になりたい子どもが出てきてほしい」という脇山町長の話を思い出した。